発刊に当って

南米ペルーのリマにある博物館には，古代の遺跡から発掘されたサツマイモの乾燥物や，サツマイモをモチーフにしたさまざまな土器や織物が陳列されている。また，コロンビア，エクアドルからペルーに至るアンデスの麓には，今でも時折，自生状態に近いものを見ることができるし，リマの郊外に散見する小規模な灌漑畑にはイチジクや野菜に混じって多様な品種が栽培されている。これらの地域では太古の昔からサツマイモが親しまれ，食べられ続けてきた。そしてペルーからポリネシアのマルケサス諸島にサツマイモが伝わったのは 4 世紀頃で，多くの島々を通ってニュージーランドに達するまでにはさらに千年の歳月を要したとみられている。世界に急速に広まったのはヨーロッパ人が世界中を航海するようになった 16 世紀以降のことで，中南米を出発したサツマイモがヨーロッパ，アフリカ，インド，フィリピン，中国などを経由してわが国（琉球）に渡来したのは 17 世紀初頭のことである。それ以後琉球から九州へ，九州から本州へと北上に北上を重ねて百年後，ついに東北地方にまで広まった。日本各地で建立されているサツマイモにまつわる神社や顕彰碑は，サツマイモと人々との織り成すさまざまなドラマが展開されてきたことを物語る。

しかしサツマイモ本来の特性がいろいろな場面で開花し始めたのは，実はごく最近のことであって，現在までの約 4 百年間は，飢饉や貧乏，あるいは屈辱感といった暗いイメージとともに語られることが多かった。サツマイモの歴史は飢えの歴史であったといえるだろう。また一方で，それは厳しさに耐え，乗り越えてきた不屈の歴史でもあり，いつの時代にも明るさとバイタリティーを内に秘めながら発展し続けてきたともいえる。サツマイモはもともと旺盛な生命力と幅広い適応力が持ち味で，いも掘りに夢中になっている子供たちの笑顔のように元気で明るいイメージがぴったりする作物なのである。

時あたかも 2008 年は「国際いも年」に当り，ジャガイモやサツマイモを称え感謝する催しが各地で行われた。そして，2010 年は財団法人いも類振興会の設立 60 周年に当る。このような時期に，広くサツマイモを理解していただくためにサツマイモを網羅的に解説した事典を公刊するのはきわめて意義深いものと考えられる。

本書は高校生から一般の消費者，あるいは農家や研究者までの広い読者を想定して，できるだけ平易な表現で記述するように努めたつもりである。このような総合事典はサツマイモ関係では全く初めての試みであり，内容も十分整理されているとは言えない。今後各方面からのご指摘，ご支援を得つつ改善していきたいと願っている。

おわりに，本事典の公刊を企画し，編集に精力的にお取り組みいただいた財団法人いも類振興会狩谷理事長はじめ関係者の方々，ご多用中にもかかわらず執筆をお引受けいただいた皆様に厚くお礼を申し上げる次第である。

2010 年 1 月

企画編集委員長　小 林　　仁